20070

当院におけるDoor to balloon time の現状と取り組み

【背景】ST上昇型心筋梗塞（STEMI）において、いかに早く再灌流を得ることができるかが重要であり、そのために患者の来院からPCIの再灌流までの時間 Door to balloon time（DTBT）をできるだけ短縮することが重要である。当院での放射線技師の勤務体制は日勤帯での心臓カテーテル検査業務を行っていない技師も夜勤帯での検査には対応しなくてはならないことがある。【方法】2014年4月から2015年4月の間に当院緊急搬送された急性冠症候群（ACS）のうち、STEMI症例を対象にDTBT現状把握を行い、心臓カテーテル検査業務を行う技師に心臓カテーテル検査についてアンケート調査を行った。アンケート調査をもとに放射線技師として勉強会の開催や DTBT の取り組みについて検討した。【結果・考察】DTBTの現状を把握することができた。勉強会を開催することにより意識が変わった。各コメディカルとの役割などを把握することで DTBT の短縮に繋がると考えられた。【結語】DTBTの短縮には医師のみならず、コメディカルスタッフもチームとなった取り組みが重要である。